

声楽 アドバイザー



篠崎 加奈子（ソプラノ）

宇都宮市出身。宇都宮短期大学附属高等学校音楽科卒業。東京音楽大学音楽学部声楽専攻声楽演奏家コース卒業、同大学大学院声楽専攻（研究領域：オペラ）修了。オーストリア（ウィーン）に渡り4年間研鑽を積む。私立プライナー音楽院オペラ科、ウィーン国立音楽大学研究科（声楽専攻）を修了。

2006～2009年ウィーン国立音楽大学夏期音楽セミナーに参加。ディプロム取得。読売新人演奏会、ウィーン市祝祭週間演奏会等に出演。第九や宗教曲等のソリストを務める他、「魔笛」「ラ・ボエーム」「トスカ」「フィガロの結婚」等のオペラにも主要な役で数多く出演。栃木県総合文化センター開館25周年記念公演オペラ「蝶々夫人」ではタイトルロールを演じ好評を博す。

第2回東京音楽大学コンクール 第2位、第13回《長江杯》国際音楽コンクール・声楽部門（一般の部A）第4位、第2回 東京国際声楽コンクール（一般の部）審査員特別賞受賞、座間歌曲祭第3回日本歌曲コンクール入賞。

これまでに声楽を故・名倉佳子、故・名倉省三、故・伊藤亘行、坂本紀男、故・中沢桂、故・芹沢文子、市川倫子、マーギット・クラウスホーファー教授の各氏に、コレペティートルを平郁夫、山田佐和子の各氏に師事。

現在、演奏活動をしながら後進の指導にあたる。定期的に幼稚園・保育園などで歌唱指導・音楽全般のレッスンを行い、子どもたちへの音楽教育活動にも力を入れている。

音楽教室・音楽団体Kling Klang主宰。ヴェルデ会会員。宇都宮短期大学音楽科・同附属高等学校音楽科講師。

◆ はじめに

ひとりひとりが持つ素晴らしい楽器、それが声帯であり、体です。声帯は自分で直に触れることも見ることも簡単には出来ない、唯一無二の不思議な楽器でもあります。豊かな響き、心地良い響きが得られる迄には日々の努力や地道な練習が欠かせません。一朝一夕にはいかないからこそ面白いのかもしれませんがね。



(シェーンブルン宮廷劇場)

◆ 日々の練習

声帯はとても繊細な楽器です。スポーツと同じで準備運動をせずに無理をすれば怪我につながります。ウォーミングアップを必ずしましょう。体をリラックスさせること、姿勢、顔の筋肉、顎関節、舌の動きなど自分を客観的に観察することが大切です。発声練習も楽しみながら行えるといいですね。骨格、口の形、大きさ、舌の長さや厚み、唇の形、全てひとりひとり異なります。発声練習にも得意・不得意があって当然です。自分に合った発声練習を見つけましょう。

◆ 平面の楽譜から立体的な音楽へ

音楽を学んでいく上で時代背景、作曲家の人物像、政治情勢、美術史、舞踏史など様々な観点からアプローチしましょう。もちろん語学の勉強も必要です。平面の楽譜を読み込み立体的な音楽を作ることが奏者には許されています。詩や台本の他にも関係書籍を読み、CDなどで曲を知ること、今は比較的簡単にできるようになりました。しかし、併せて楽譜から読み取る力をつける必要があります。歌の場合、単旋律ですから、

つい自分が歌うメロディーだけをなぞって勉強してしまいがちです。重唱であれば相手のパートを知る、伴奏のパートを弾いてみるなど、とても大切です。オペラであればフルスコアを見てどんな楽器が使われているのかを知ることができます。調性感や和声感を養う、理論的に組み立てられる知識を得ること、耳を育てることで作曲家の意図する音楽に初めて近づくことができると思います。



(クリムト作 ベートーヴェンフリーズ)

◆ 空間を味わう



私が演奏する際に大切にしていることは、空間を味わうことです。舞台袖では毎回、なんともいえない緊張感に包まれます。しかし舞台に出れば聴衆から大きなエネルギーを受け取ることができます。

ですから、私は舞台に出た瞬間から聴衆とコンタクトを取るように心がけています。

受け取ったエネルギーを奏者は音楽に乗せてホール全体を満たすのです。緊張して思ったような演奏が出来なかった、と耳にすることがあります。しかし、緊張することは決して悪いことではありません。寧ろ、適度な緊張は必要です。まずは「緊張＝悪い」という思い込みを無くしましょう。その上で自分の体や呼吸を感じ、冷静にコントロールすることが出来れば、心に響く豊かな歌が歌えることでしょう。

私の好きな言葉に musizieren(ムズィツィーレン)があります。直訳では「演奏する」「合奏する」 舞台に出たら難しいことは忘れて、単純に心と体を解放し「音楽をする」だけで十分ではないでしょうか。

◆ おわりに

音楽の勉強をしていくことは、決して楽しいことだけではありません。しかし、それ以上に大きな喜びや幸せを得られるものです。日々の積み重ねや見えない努力が緻密な音楽を作り、1音の美しさとなります。音や声は目に見える形としては残りませんが、聴衆の記憶には残ります。なんて素敵なことなのでしょう！

これまでに私が多くの先生方から、惜しみなく与えていただいた知識や技術を更に深め、今後は次の世代に伝えていこうと思っております。探求心を持ち、音楽を通じ豊かな人間性を養いましょう。そして、演奏の機会を得られたこと、舞台に立てること、人と人のご縁、繋がりに感謝の気持ちを忘れず、真摯に音楽に向き合いましょう。

これから多くの舞台を経験する皆さんに、少しでもポジティブなアドバイスとして届くことを願っています。

「歌に関して言えば、私たちは死ぬまで学生なのよ」(ソプラノ歌手 マリア・カラス)



(アリア「ある晴れた日に」)

栃木県総合文化センター開館25周年記念公演
オペラ「蝶々夫人」



(カーテンコール)